

# 命の尊厳、おもちゃとは

## 広がりを見せる三農の「命の花プロジェクト」

県立三本木農業高校（瀧口孝之校長）の生徒たちが、殺処分される犬や猫の姿を目の当たりにし、『動物の殺処分を減らしたい』という思いから生まれた「命の花プロジェクト」。

ペットブームといわれる現在、動物の命の尊厳、おもちゃに一石を投じるこのプロジェクトは、報道などで紹介されると大きな反響を呼び、プロジェクトに賛同する熱い思いが全国に広がっています。

### 生徒たちに「衝撃」を与えた現実

平成24年3月、授業の一環として動物科学科の愛玩動物研究室の生徒たちが青森県動物愛護センター（青森市）を訪れました。

センターで生徒たちが見たものは、飼い主の都合などにより、センターに持ち寄られた引き取り先が見つからない犬や猫たちの末路——。「殺処分」

生徒たちは、殺処分された犬や猫が焼却され、残された骨は事業系廃棄物「ゴミ」として捨てられる現実を知り、大きな衝撃を受けました。遠足気分だった姿は一変し、帰りのバスは重苦しい雰囲気になりました。

校内で牛や豚などの動物の世話をし、普通の人以上に動物に接する機会が多い生徒たちにとって、この現実は一瞬にして「命」について考えるきっかけとなりました。

### 命について考え、思いを行動に

人の命と犬や猫などの動物の命の違いとは——。

人は大切に埋葬されるのに、家族同然に暮らしていた動物は、飼い主のいろいろな事情があるにせよ、一部は「ゴミ」として捨てられます。その数は青森県だけでも年間約2千頭。全国では約16万頭にも及びます。殺処分という現実を目にし



プロジェクトに取り組む愛玩動物研究室の生徒と日野澤教諭（前列右端）

た。プロジェクトに関しては、いろいろな意見をいただきますが、皆さんに私たちの思いが伝わればいいと思います。

後輩たちには、プロジェクトを受け継いでもらい、活動を広めてほしいです。今年、被災地を訪れて「命の花」を配布しようという計画を立てましたが、実現することができませんでした。今後、被災地で命の花を配布して、被災されたかたがたの癒しの一つになってくれることを願います」と、後輩たちの活動に期待を寄せます。

### 三農祭で「命の花」の鉢上げ体験を行います

三農祭で、ご紹介している「命の花」の鉢上げ体験を行います。ぜひ、ご来場ください。

とき 11月1日(土)・2日(日) 午前9時30分～午後3時  
ところ 三本木農業高校  
※数に限りがあります。

三本木農業高校 ☎019-5341



### つながる「命の花」

## バトンを受け継ぎ、「思い」を次の世代へ



現在「命の花プロジェクト」に取り組んでいる生徒は、3代目になります。当初、自分たちの学年は楽しい研究をしたいという思いがありました。しかし、2年生のときに訪れた愛護センターで殺処分される動物を見たときに「先輩たちの思いを受け継ぎ、自分たちもやらなくてはならない」と、強く思ったと言います。

最上級生となった今年、この活動をもっと多くの人に知って欲しい、もっと活動を広げたいという目標を持ち、県内の中学校を訪問して「命の授業」を行いました。

同年代の県立黒石商業高校ペットビジネス班の生徒は、三農を訪れ、実際に骨を砕く作業を体験しました。命のおもさをじかに感じ、「津軽でもこの取り組みを広めていきます」と、力強い言葉をくれました。

愛玩動物研究室のリーダーを務める石橋香織さんは「最初はこの活動がこんなに広がるとは思いませんでした。今では全国のかたからお手紙をいただいたり、芸能人などのブログで紹介されたりして、活動の励みになっています。海外の動物愛護団体からも寄附をいただきま



命の花の鉢上げを体験。イベント参加者らも「命」について考えるきっかけとなりました

「殺処分ゼロ社会の実現」を目指して続く地道な活動

9月27日に開催された三農主催の「犬の祭典2014」。会場の傍らに設けられた「命の花体験コーナー」には競技の合間に参加者らが一人、また一人と駆け寄り、命の花の鉢上げを体験していききました。体験者は「飼い主には責任を持って飼ってほしいです。将来、殺処分がゼロになるといいですね」と、話します。

「命の花プロジェクト」は、多くのかたから共感されるだけでなく、昨年開催された「第64回日本学校農業クラブ全国大会」で最優秀賞、あわせて文部科学大臣賞を受賞。今年、日本動物愛護協会が主催する「第6回日本動物大賞」でグランプリを受賞するなどその活動に対し、高い評価を得ています。

### 元気に咲いた「命の花」を手に訴える

殺処分の現実を訴える「命の花プロジェクト」は、平成24年5月に三農が主催した「十和田わんわんフェスタ」に集まった参加者の前で初めて紹介されました。

立派な花を咲かせるマリィーゴールドと「殺処分ゼロを目指して」と記したシールが貼られた鉢を手にし、取り組みを紹介する生徒たち。その言葉に涙を流しながら聞いてくれた参加者もいたと言います。手応えを感じた生徒たちは、市内の介護老人保健施設や保育園を訪問。お年寄りや子どもに花を配布し、命の大切さを訴えました。

その後も三農祭や愛護センターのイベントなどで命の花を配る生徒たち。平成24年に始まった活動は、後輩たちに受け継がれています。

これまでの約2年半の活動で配った「命の花」の鉢植えは約2000鉢に及びます。「この活動の影響なのか、青森県の殺処分数が減ってきています」と、生徒たちを指導する日野澤義子教諭はうれしそうに話します。

グランプリ受賞を小山田市長に報告した際、瀧口校長は「報道や受賞などで脚光を浴びていますが、生徒たちはおごることなく、地道に殺処分ゼロになるまで」という思いで活動しています」と、強調しました。

高校生という多感な時期に「命」について真正面に向き合う生徒たち。殺処分の現実を見て命の尊厳を考え、重いレンガで涙を浮かべながら骨を砕いて命のおもさを感じました。「十和田の人たちにも私たちの活動をもっと知ってほしい」と、話す生徒の皆さん。高校生の「命」に対する思いから始まった「命の花プロジェクト」。三本木農業高校から十和田市民へ、そして全国へ——。広げましょう。

### 「動物の殺処分をゼロに」

